

[博士論文審査要旨]

申請者：近見名緒子

論文題目 IFRS 改定プロジェクトにみる会計思考の変遷に関する研究
－MoU プロジェクトを中心として－

審査員 万代勝信

佐々木隆志

福川裕徳

IASB と FASB との間で進められている IFRS 改定プロジェクト、特に 2011 年までにコンバージェンスを達成するとされていた MoU プロジェクトは混迷を続け、現在においてもいまだ完成をみていない。近見氏は、ストック重視、公正価値重視の画一的な会計基準と、稼得利益計算を重視する従来の会計基準の背後にある会計思考の相克が、MoU プロジェクトが完成しない原因であるという仮説を設定する。そして、前者の会計思考の背後にある会計思考を会計利益モデルと、後者のそれを純資産簿価モデルと理解し、MoU プロジェクトの分析を通じてその仮説の検証を試みている。取りあげたプロジェクトは、金融商品、保険契約、収益認識、リースの 4 つのプロジェクトである。

評価すべき点は次の通りである。

第一に、4 つのプロジェクトについて、ディスカッションペーパー、公開草案等を丹念に検討し、分析を加えていることである。プロジェクトの中には 10 年を超えるものもあり、その間に発表された公表物はかなりの数に上る。それらを網羅的に取りあげて検討、分析していることは評価に値する。

第二に、個別のプロジェクトについて、プロジェクトの開始から公開草案までの流れを 5 つに細分化されたモデルに位置付けることにより、プロジェクトのダイナミズムを描き出すことに成功していることである。

第三に、MoU プロジェクトの分析においては、資産負債アプローチと収益費用アプローチを座標軸に据えて分析が行われることが多いのに対して、本論文では、企業価値評価の観点から会計利益モデルと、それとはパラダイムを異にする純資産簿価モデルを分析の枠組みにおき、新たな視点からの分析を試みていることである。

しかしながら、指摘すべき問題点は次の通りである。

第一に、会計モデルを 5 つに細分化し、その中での各プロジェクトのダイナミズムを描いているが、5 つのモデルの中には MoU プロジェクトの分析には必要のない 2 つの理念モデルがあり、その存在のために会計モデル自体の理解を複雑にしていることである。

第二に、研究課題として、個別のプロジェクト単位でのダイナミズムと、IFRS 改定プロジェクト全体のダイナミズムを示すことを挙げているが、後者については必ずしも十分な説得力をもって説明されていないことである。

以上のような問題点もあるが、それは今後の研究により十分に解決できるものである。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせて考慮して、本論文の執筆者が一橋大学学位規則第 5 条第 1 項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。